論文の内容の要旨

論文題目　　アンドレ・ジッドとキリスト教

——「病」と「悪魔」にみる「悪」の思想的展開——

氏名　　西村　晶絵

本論文の目的は、1890 年代から 1930 年代までのアンドレ・ジッド（André Gide, 1869-1951）における「悪（le mal）」についての思想的展開を、「病（le mal, la maladie）」と「悪魔（le diable, le démon, le Satan, le Malin）」という二つの軸の検討を通じ明らかにすることにある。ジッドにおいて「病」と「悪魔」という二つの事象は、切り離しがたく結ばれている。様々な著作を読み解くと、彼が「病」と徹底的に向き合わねばならなかったからこそ、「悪魔」をめぐる関心や思索の展開が開かれた様が浮かび上がるからである。「病」も「悪魔」も、彼の実存のみならず、文学創作においても避けては通れない課題であったが、これら「悪」との対峙を通じて形成されたジッドの思想的独自性を浮かび上がらせることが、本研究の最終的な狙いである。

本論文は三部構成である。まず第 I 部では、ジッドと「病」の関係への着目に発し、幼少期から 1900 年代頃までの彼が、それをどのようなものとして捉え、そこに宗教思想がいかに関わっているのかを検討した。

第 1 章では、幼少期から作家活動を開始する 1890 年頃までの時期に関し、ジッドが対峙していた「病」の性質を、自伝や伝記をもとに浮かび上がらせた。自伝『一粒の麦もし死なずば』（*Si le grain ne meurt*, 1926）によれば、幼少期のジッドにとって「病」は身近な存在であった。だが、当時のジッドが克服しなければならなかったのは、単に風邪や頭痛といった身体的な不調だけでなく、自慰という「病」も含まれていた。当時の「病」をめぐる医学言説や宗教言説、またジッドの家庭環境やそこで受けた教育などを踏まえ、ジッドが対峙しな

ければならなかった「病」の性質や、心身の状態がどのようなものであったのかを明示した。

続く第 2 章は、初期作品に描かれる「病」とジッドの「病」観の連関を考察した。作家活動を開始した時期にあたる 1890 年代初頭のいくつかの作品に描かれる「病」の表象には、漸次的な変化を認めることができる。その背景として、1893 年の北アフリカ旅行での経験に注目した。結核とそれからの回復や、セクシュアリティを解放する体験により、ジッドは同旅行中に「病」観のみならず、宗教観をも変化させるに至ったからである。こうした作家自身の内面に生じた変化を念頭に置きながら、『アンドレ・ワルテルの手記』や『ユリアンの旅』（*Voyage d'Urien*, 1893）といった象徴主義の影響下にあった最初期の作品と、ジッドが独自の路線を模索し始めた頃に書かれた『パリュード』（*Paludes*, 1895）に描かれる「病」を比較し、それらの間に見出せる共通点や相違点、各「病」の特徴を析出した。そしてそれらをジッドの「病」をめぐる思索の変化のなかに跡付けることにより、1890 年代前半に認められるジッドの「病」観の特徴やそれとの文学観の関わりを浮かび上がらせた。

第 3 章では、第 2 章で確認した「病」と、1890 年代後半以降の著作に現れる「病」の描写に決定的な違いが認められることへの着目に発し、その変化の起こりを 1895 年のアルジェリア旅行での出来事を踏まえて検討した。この旅行中、自らの性的指向が同性に向けられたものであることを理解したジッドは、ついに心身の平穏を得た。以後彼は、「病」を各人に固有の性質として、いわば個性として捉えることにより、恐ろしく退けるべきものというそれまでの「病」観から脱する。各人が自身の生を謳歌することの重要性を説くジッドの立場は、1897 年の『地の糧』（*Les Nourritures terrestres*）にも見出すことができる。しかし、こうした見方を可能にするためには、「病」＝「罪」とするキリスト教的な見方を克服しなければならなかったはずである。そこで、ジッドが「病」についての独自の見方を形成するにあたり、キリスト教といかに折り合いをつけたのかという問いを、1899 年のニーチェ論「アンジェルへの手紙（VI）」（« Lettre à Angèle »VI）の分析を通じて考察した。そこで展開される「病」とキリスト教思想の連関を詳らかにしたうえで、『背徳者』（*L'Immoraliste*, 1902）に描かれる「病」を分析し、作中に示される当時のジッドの「病」観を明示した。

第 II 部では、「病」を通じてキリスト教思想が深まった 1910 年代以降の作品において、「病」とキリスト教信仰をめぐる作家の問題意識がいかに表出しているのかを検討した。

まず第 1 章では、ジッドの作中に繰り返し現れる「盲目」を取り上げた。「盲目」の問題を扱ったジッド作品は数多いが、特に『田園交響楽』（*La symphonie pastrale*, 1919）と『エディップ』（*Œdipe*, 1931）はこれを主題としており、「盲目」を通じて、キリスト教信仰をめぐるジッドの問題意識が明確に示されている。これらの作品において、何が「盲目」とされているのかを検討し、そこから浮かび上がる宗教的問題意識を分析した。その結果、ジッドは「ルカによる福音書」に示されたような、盲人に導かれる盲人のテーマを具現化することで、神と自分自身の中間に位置する存在を否定的に見ていることが明らかとなった。また、そのことを踏まえジッドにおける「プロテスタント」の概念も明示し、ジッドのキリスト教思想

の特徴についても浮き彫りとした。

続く第 2 章は、『法王庁の抜け穴』（*Les Caves du Vatican*, 1914）に描かれる「病」を、ジッドとカトリック教会との関係性を通じて検討した。宗教に対する問題意識を俎上に載せたこの作品には、「病」に振り回される多くの登場人物が描出される。そして彼ら各々の病との向き合い方は、カトリックという宗教との向き合い方と密接に結ばれていることが指摘できる。病める者たちが奇跡を求めて全国各地から集まったルルドの傷病者巡礼ブームとカトリック信仰の盛り上がりという歴史的事実に照らしつつ、『法王庁の抜け穴』における「病」や、それを前にした登場人物たちの言動を検討し、そこから浮かび上がるジッドの宗教や信仰をめぐる立場を明らかにした。

第 3 章では、「病」と結びつけて語られてきたセクシャリティを自らのものとしていたジッドが、作品においてそれをいかに描き出したのかを考察した。キリスト教的価値観において否定されてきた自慰への欲求や同性愛という性的指向によって、多かれ少なかれ葛藤を抱えていたジッドにとって、キリスト教信仰の枠内においてこれらを捉え直し、各人のセクシュアリティを承認することは急務の課題であった。だが、彼は必ずしもすべてのセクシュアリティの解放を当初から説いていたわけではない。『イザベル』や『コリドン』さらには三部作へと至る 1910 年代から 1930 年代の作品を辿り、セクシュアリティをめぐるジッドの描き方の特徴や、そこに透けて見える宗教言説、医学言説からの影響についても明らかにした。

第 III 部では、「病」に次いでジッドの内に生じた「悪」の思索として、「悪魔」の問題を取り上げ、「病」から続く「悪」への関心のなかに位置づけながら、その思想的特徴を明らかにすることを試みた。

第 1 章ではジッドが 1911 年頃に悪魔という存在を思考し始めたという事実に拠り、この時期に示された悪魔論がいかなる性質のものであったのかを検討した。日記の記述によれば、ジッドは 1914 年頃に友人のラヴェラと交わした会話をきっかけに、「悪魔」について意識し始めた。その後、ウィリアム・ブレイクの『天国と地獄の結婚』を読んだジッドは、この著作の解釈を通じて、「悪魔」についての思索を深めることとなった。ジッドの「悪魔」との出会いから、彼の「悪魔」論の特徴や、「悪魔」と芸術の関係性についての思索の特徴を考察することで、ジッドが「悪魔」に与えた特異な性質を析出した。

そうした悪魔論を踏まえ、第 2 章では『贋金使い』（*Les Faux-monnayeurs*, 1926）に描かれる「悪魔」に着目した。この作品では各登場人物を描写する際、「悪魔」という言葉がしばしば現れる。しかし、ここでの「悪魔」とは、彼らの内に存在する弱さや苦悩からくる精神的な誘惑を意味している。「悪魔」に憑かれた登場人物たちの多くは、この存在から逃れることができず、知らず知らずのうちに翻弄されてしまう。誘惑に流され、自らの価値観においてのみ行動している彼らは、絶対者（神）をもはや感じることはなく、また必要としてもいない。そうした個人主義的な世界観の極みとして描かれるのが、自殺行為である。この行

為を通じて、「悪魔」が勝利する世界に生きる人間の悲惨さが浮き彫りとされる。だが、ジッドの真意は、「悪魔」による人間の悲劇と、神の存在の希薄さを表現することにあったわけではない。ジッドはこれらを強調することによって、逆説的に、安易に「悪」を退けて神を「善」と結びつけるカトリック的な価値観に警鐘を鳴らし、キリスト教の信仰と矛盾しない仕方で「悪」を捉え直そうとしているからである。『贋金使い』に描かれる「悪魔」の分析を通じ、その性質を明らかにした上で、「悪魔」や神、信仰についてのジッドの特異な立場を解明した。

以上を通じ、ジッドは世の中に存在する様々な問題に関し、独善的な立場や権威主義的な見方を否定し、多様な見地の存在や他者の価値観を認めながら、自らを肯定して生きることの重要性を説こうとしていたことが明らかとなった。彼がそうした立場を通じて目指したのは、自らの理想とするキリスト教的な社会の構築であり、ジッドはあくまでもキリスト者として社会や時代と格闘した作家であった。だが、ジッドの理想とした人間の在り方、社会の在り方は、必ずしもキリスト教的な価値観の内部でのみ意義のあるものではない。ここに、「悪」を巡ってジッドが示した思索が、彼個人に留まらない普遍性を有しているといえるのである。